

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01261

研究課題名(和文) <語>の本質に関する総合的研究 孤立型・膠着型・複統合型言語の語形成と句形成

研究課題名(英文) A comprehensive study on the nature of words: word- and phrase-formation in isolating, agglutinative, and polysynthetic languages

研究代表者

沈 力 (Shen, Li)

同志社大学・文化情報学部・教授

研究者番号：90288605

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、語の外形的定義を文法的・音韻的特徴に求める従来のアプローチと異なり、形態素やその前段階の音連鎖という内的要素がどのように語に組み込まれるかを探求することで、異なる言語類型—孤立型、膠着型、複統合型、疑似複統合型—の語形成を分析し、語の本質を明らかにすることを目的としている。

この4年間の研究成果は、『類型論から見た「語」の本質』(2023年、ひつじ書房)という論文集にまとめられた。この論集では、自然言語が多音節言語と単音節言語に分けられること、多音節言語の語形成が語彙レベルと統語レベルの両方で行われるのに対し、単音節言語の語形成は統語レベルでのみ行われることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、環太平洋の諸言語の語形成の事実を記述・理論化することを試み、従来の言語理論に対する新たな見方を提供することを目的としている。北米原住民の諸言語と東アジアにある孤立的言語や膠着的言語を対象にした記述・理論的研究書は数多く存在するが、それらの言語の語形成を比較対照し、そこから自然言語の「語」を生成する普遍的なメカニズムを中心に議論するような学術論文集は日本国内で初挑戦である。従来の言語類型論では、語や句の特徴に関する仮説が主流であったが、上記の「形態素設定」に基づく仮説は言語類型論において初めてのことである。この提案は、言語類型論の理論構築に新たな波紋を投じる可能性があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study diverges from the traditional approach that seeks to define words based on grammatical and phonological characteristics. Instead, it explores how internal elements such as morphemes and pre-morphemic sound chains are integrated into words. The goal is to analyze word formation across different linguistic types: isolating, agglutinative, polysynthetic, and pseudo-polysynthetic, and thereby elucidate the essence of words. The results of this four-year research project have been compiled in a collection of essays titled "The Essence of Words from a Typological Perspective," published in 2023 by Hituzi Syobo. The collection reveals that natural languages can be divided into polysyllabic and monosyllabic languages, with word formation in polysyllabic languages occurring at both the lexical and syntactic levels, whereas in monosyllabic languages, it occurs solely at the syntactic level.

研究分野：言語学

キーワード：言語類型論 語形成 琉球方言 孤立的言語 複統合的言語・膠着的言語 形態素設定 アメリカ原住民諸言語 チワン語と漢語

1. 研究開始当初の背景

自然言語には、小さい要素を順次組み合わせて大きなまとまりを作るための計算法 (computation) が備わっている。語彙部門は辞書に蓄積された形態素および語のリストに基づいて新たな語を形成・計算する部門であり、統語部門は辞書に登録された語および語彙部門で作られた語を組み合わせて句・節・文を形成・計算する部門である。理論言語学では1970年代初頭から、両部門の関係および文法体系全体における語形成の位置付けに関して語彙論主義 (語はすべて語彙部門で形成される: Di Sciullo and Williams 1987) と統語論主義 (語はすべて統語部門で形成される: Halle and Marantz 1993) の間で論争が続いてきた。しかし、これらの理論は屈折型のヨーロッパ言語に偏重するため、多くの形態素を連ねて複合語や述語連鎖を作る日本語のような膠着型、主語・目的語・動詞といった文の構成要素をすべて一語の中に取り込んで表現するネイティブアメリカン等の複統合型、さらには1つの形態素が1つの語として機能する中国語のような孤立型の言語には容易に適用できない。

上記の論争に関しては、語形成の適用を語彙部門でも統語部門でも認める「語彙・統語両立論」(影山 1993, 2018) もある。両立論は内容的に語彙論主義と統語論主義の双方を包含するため、日本語以外の言語にも適用可能な包括的な枠組である。この枠組を用いると、3種類の言語タイプの特徴は次のように整理できる。

表 1

	A. 複統合型言語	B. 膠着型言語	C. 孤立型言語
語彙部門での語の形成	○	○	△
統語部門での語の形成	△	○	○

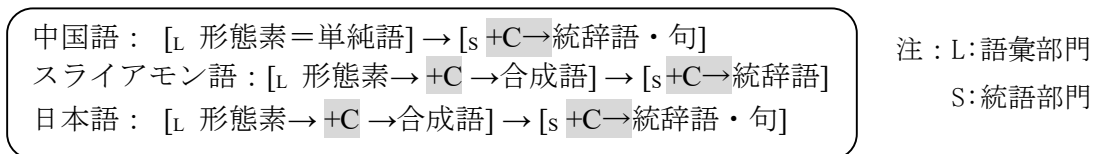
B (膠着型言語) を軸として、A と C がミラーイメージになる。複統合型のスライアモン語では、他のタイプの言語で「文」として表現される長い形態素連鎖が一語として語彙部門で形成される (渡辺 2017)。他方、孤立型に関しては「中国語には語がない」(Hockett 1944) とさえ言われるように、中国語の「複合語」は句と同等の振舞いを示し、統語部門で作られると考えられる (たとえば「学³⁵習³⁵」は「学³⁵什麼習³⁵ (ナニガ学習ダ!)」(「什麼」は不満を表す挿入句) のように分離可能: 沈 2006)。語彙・統語両立論は言語タイプによる語形成部門の分布の違いを従来の諸説より端的に捉えることができるが、同時に、この分布の違いがどのような動機づけと生成メカニズムによって生じるのかという問題を新たに提起する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、この「語形成の動機付けとメカニズム」を、異なる言語類型に属する言語の調査・記述・分析により明らかにすることである。これにより、「語とはなにか」という言語学の難問に一定の解答を与えるとともに、「語彙論主義」対「統語論主義」の形式的な論争を超越した、実質的でバランスのとれた語形成の理論に到達することが可能になる。また、スライアモン語・ハイダ語・琉球語・チワン語という消滅危機言語の研究から社会貢献が期待できるとともに、将来的には言語教育、辞書編纂、データサイエンス、自然言語処理、IT産業など多方面での応用に資するという波及効果もある。

本研究の独自性としてあげられるのは、小さい要素を大きい要素に組み立てるための計算法が文法体系のどこで導入されるのかという観点から、類型論的に両極に位置付けられる複統合型言語と孤立型言語の語形成過程を網羅的に記述し、それらの特徴を、理論的分析が比較的進んでいる日本語の語形成と結び付けて体系化することである。計算法の導入を「+C」と表記して簡略に表すと図1のようになる。

図 1:



語彙部門は、統語構造に対して形態素リストと語リストを提供する部門である一方、形態素リストから適切な要素を選んで語を構築する生産部門でもある。語の生産方法として、中国語の語彙部門では、形態素リストの要素 (音連鎖) に声調を付与して自立形態素を作るだけで、それら

をさらに複合することはしない。代わりに、統語部門の計算法を利用して統辞語も句も統語構造で無制限に形成する。つまり、中国語で「複合語」のように見えるものは、実は統語的な合成語である。対照的に、スライアモン語では語彙部門で計算法を利用して形態素を文相当の大きいまとまり（語）に組み立てるが、統語構造では主に統辞語を形成するが、句を形成しない。この観点からすると、日本語は、孤立型と複統合型の両方の計算法を併せ持ち、語彙部門でも統語部門でも合成語を作ることができる。このアプローチはまた、日本語と姉妹関係にあるが「係り結び」を保持する琉球語が日本語以上に膠着的であるのはなぜか、カナダ・ブリティッシュコロンビア州のハイダ語は多数の語根や接語を組み合わせる語を作るが、同じく北米のスライアモン語のような複統合型ではないのはなぜか、といった新たなリサーチクエスションへと発展する。

本研究の学術的な創造性は、既存の研究のように意味を持つ最小単位としての「形態素」だけを見るのではなく、形態素以前の音連鎖（明確な概念的意味も明確な品詞も持たない音形のみ）の形式。仮に「準形態素」と呼んでおく）にも着目することである。準形態素とは、たとえばオノマトペを構成する単音ないし音節である。

図 2 : 形態素リストに含まれるもの $\left\{ \begin{array}{l} \text{(一般)形態素 : [音形式] + [概念]} \\ \text{準形態素 : [音形式] + [\emptyset]} \end{array} \right.$

準形態素という概念を導入することにより、①形式（音形）はあるが明確な語彙的概念を有さない形態素はいかにして語になるのか、逆に、②表現しようとする意味概念があるのにそれに対応する形式が不足する場合、話者はどのような戦略をとるのかという、従来考えられなかった研究テーマが創造される。

3. 研究の方法

本課題では、チーム1とチーム2の研究成果を総合して、普遍性のある理論へと導くことを最終目的としている。沈はチワン語と中国語の形態論・統語論に関して、星は形態論・語形成論の理論研究および日本語、渡辺はスライアモン語を中心とする北米・セイリッシュ語族、堀は北米・ハイダ語、下地は伊良部方言を中心とする琉球諸語、秋田は日本語その他のオノマトペについて、それぞれ国際的に認められた研究成果をあげている。本研究課題は、それらの研究成果を一層深化・発展させ、総合化するものである。

現地調査による一次データに基づくことを基本とし、参加者は言語データ調査とデータベース構築という2つのリサーチ・チームを編成した。言語データ調査について、沈はチワン語・中国語、渡辺はスライアモン語、堀はハイダ語、下地は伊良部琉球語に関して、それぞれカナダ、中国、沖縄で調査を行う。現地調査で得たデータをもとに、毎年国内で全員が集まり研究討議を行う。対象となる言語の形態統語法が比較対照できるように、質問票を作り、同一の意味内容を表す構文を現地調査で収集する。データベース構築と理論構築について、沈はチワン語・中国語の統辞語における分離の条件を明らかにし、動詞の複合度に基づくデータベースを構築・公開する。秋田は、日本語のオノマトペの構成と意味機能をまとめたデータベースを構築・公開する。最後に、沈・星は、上記の諸データを総合して、一般言語学における語彙理論を構築する。本研究の研究体制と研究分担者の役割は次に示すとおりである。

4. 研究成果

この4年間の研究成果は、『類型論から見た「語」の本質』というタイトルの論文集にまとめられ、2023年11月にひつじ書房から出版された。この論集では、自然言語を多音節言語と単音節言語に区分し、多音節言語では語形成が語彙レベルと統語レベルの両方で行われるのに対し、単音節言語では語形成が統語レベルでのみ行われることを明らかにしている。以下、具体的に2つの面の研究成果を紹介する。

4.1. 記述面の研究成果

A. 中国黄河・汾河合流地域（8つの縣市）の諸方言における形態素調査を行った。すなわち「黄河流域（吉県・郷寧県・河津市・万栄県）諸方言における3810形態素」, 「汾河流域（襄汾県・侯馬市・新絳県・稷山県）諸方言における3810形態素」の調査が完成した。

B. 西日本18の縣市の諸方言における存在動詞の文法化「ヨル・トル・テル」のアスペクト機能を調査した。それは「大阪府、京都府、滋賀県、奈良県、兵庫県、三重県、岡山県、島根県、鳥取県、広島県、山口県、高知県、岐阜県、徳島県、愛知県、岐阜県、長野県、福井県」であった。

C. 中国語中国各官話地域において動詞分離の用法についてインタビュー調査を行った。それらのデータは23年度の理論的研究(cf. 沈2023)の重要な根拠になっている。

中原官話：(関中地域・晋南地域・商丘地域)方言における動詞分離、

冀魯官話：(山東賓州)方言における動詞分離、

東北官話：(鞍鋼地域・黒竜江地域)方言における動詞分離、

北京官話：(北京・天津)方言における動詞分離

D. 中国秦晋豫(陝西省, 山西省, 河南省を跨る)諸方言における到達動詞「着(つく)」の意味機能を調査した。

E. 言語調査だけではなく、「語の性質」に関する記述的研究成果もあげている。まず、沈代表は「述語の叙述機能についての表と裏」、秋田分担者は「オノマトペの音象徴性再訪」、「日本語のオノマトペと言語類型論」、下地分担者は「日本語諸方言の格標示と分裂自動詞性」、「方言研究における例文提示法について」、堀分担者は「ハイダ語における『語』：音韻面と形態面から」、「ハイダ語の所有構造と譲渡可能性」、渡辺分担者は「スライアモン語の語形成について」、「A Sliammon text: 'When Coming Out of the Woods,' as told by Mary George」、星分担者は「虚辞動詞の分散形態論的アプローチ」などを公表している。

4.2. 理論面の研究成果

[対照研究]：複統合型、膠着型、孤立型の各言語についての理論的研究成果が論文として公表された。さらに、「語形成」についての新しい仮説も提案された。これは、形態素設定のタイプが語形成の発生部門を決定するというもので、単音節形態素を採用する言語では合成語が統語部門で発生し、多音節形態素を採用する言語では語彙部門と統語部門の両方で合成語が発生する。ただし、単音節言語においては統語的に生成された合成語が辞書に登録されることが一般的である、多音節言語では統語的に生成された合成語は一般に辞書に登録されない。この成果は第167回日本言語学会公開シンポジウム「語とは何か」で公表されている。

[理論的成果]：部分削除規則(PDR)と述語分離規則(PSR)を発見。

上記の2つの規則を発見することによって、意味を持つことは形態素形成の必要条件ではなく、構成素を成すことこそ必要十分条件であることを打ち出した。この研究成果は中日理論言語学研究会主催・同志社大学言語生態科学研究センター共催のシンポジウム「類型論から見た「語」の本質」で発表した。また『類型論からみた「語」の本質』という論文集(沈力編, 2023年, ひつじ出版)に収録されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Watanabe, Honore.	4. 巻 15
2. 論文標題 A Sliammon Text: "First Pregnancy", as Told by Mary George	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 93-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/99898	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀博文	4. 巻 5
2. 論文標題 ハイダ語のピッチ付与規則について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 静言論叢	6. 最初と最後の頁 125-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下地理則	4. 巻 21(2)
2. 論文標題 グラマーライティング：方言の記述文法を書くガイド	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 136-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋田喜美	4. 巻 21
2. 論文標題 日本語の人名における表記の冗長性：関係形態論の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 45(5)
2. 論文標題 Phonation types matter in sound symbolism	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cognitive Science	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/cogs.12982	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 45(4)
2. 論文標題 A typology of depiction marking: The prosody of Japanese ideophones and beyond	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies in Language	6. 最初と最後の頁 865-886
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星英仁	4. 巻 98
2. 論文標題 外池滋生著 ミニマリスト日英語比較統語論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 160-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下地理則	4. 巻 16.1
2. 論文標題 日本語学大辞典について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本語の研究』	6. 最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀博文	4. 巻 4
2. 論文標題 ハイダ語の複文構造：従属節の分類に関する試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静言論叢/静岡大学言語学研究会	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akita, Kimi, Jingyi Zhang, and Katsuo Tamaoka	4. 巻 2
2. 論文標題 Systematic side of sound symbolism: The case of suffixed ideophones in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers, Kansai Linguistic Society	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akita, Kimi	4. 巻 12
2. 論文標題 Japanese ideophones from a typological perspective.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kobe Papers in Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀博文	4. 巻 3
2. 論文標題 ハイダ語における『語』：音韻面と形態面から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静言論叢/静岡大学言語学研究会	6. 最初と最後の頁 17-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 堀博文
2. 発表標題 ハイダ語（北米先住民言語）の「語」について：動詞を中心に
3. 学会等名 中日理論言語学研究会公開シンポジウム「言語類型論から見た「語」の本質」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下地理則
2. 発表標題 北琉球沖繩語今帰仁謝名方言における除括性(Clusivity)
3. 学会等名 日本言語学会第163回大会口頭発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Keiko Murasugi and Kimi Akita
2. 発表標題 Japanese binomial adjectives
3. 学会等名 SLE 2021: 54th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋田喜美
2. 発表標題 通言語的観点から見た日本語のオノマトペ
3. 学会等名 第121回NINJALコロキウム，国立国語研究所（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋田喜美
2. 発表標題 「なぜ笛はピーと鳴るのか：ディピクションをマークする3つの方法」
3. 学会等名 第12回動的語用論研究会, Zoom.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Murasugi, Keiko and Kimi Akita
2. 発表標題 Binomial adjectives in Japanese
3. 学会等名 Workshop on Mimetics IV: Parameters and Mimetics, 南山大学・名古屋大学.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Akita, Kimi
2. 発表標題 On the ideophonic protolanguage hypothesis
3. 学会等名 Workshop on Mimetics IV: Parameters and Mimetics, Zoom/南山大学・名古屋大学.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 述語の叙述機能についての表と裏 中国語と日本語の動作述語を例に
3. 学会等名 中日理論言語学研究会主催「シンポジウム：叙述類型論のこれまでとこれから」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 形容詞的屬性叙述功能与事件叙述功能 兼談漢日对比視角下的詞類問題
3. 学会等名 中国社会科学院語言研究所主催 “The 8th CASS-IL International Roundtable Linguistics” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 重構秦晋黄河沿岸諸方言の時空層次 以入声舒化為例
3. 学会等名 第8回CASS-JSPS共同シンポジウム「2019日中言語学シンポジウム」(招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下地理則
2. 発表標題 「日琉諸語の格体系の多様性の記述と説明モデルの構築を目指して」
3. 学会等名 日本語文法学会第20回大会パネルセッション「日琉諸方言の格と情報構造」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akita, Kimi
2. 発表標題 Ideophones and iconicity in Japanese
3. 学会等名 Pre-event lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives, 15th International Cognitive Linguistics Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋田喜美
2. 発表標題 オノマトベの音象徴性再訪
3. 学会等名 シンポジウム「言語学を越えて広がるオノマトベ可能性」, 日本認知言語学会第20回大会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 渡辺己・澤田英夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 261
3. 書名 『参照文法書研究』(アジア・アフリカ言語文化研究別冊02)	

1. 著者名 堀江薫・秋田喜美・北野浩章	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 260
3. 書名 言語類型論	

1. 著者名 秋田喜美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 音象徴知覚の日英対照: 意味地図による検討(篠原和子・宇野良子(編)) 『実験認知言語学の深化』165-189.	

1. 著者名 木部暢子・竹内史郎・下地理則	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 368
3. 書名 日本語の格表現	

1. 著者名 秋田喜美 (早稲田文学会)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 「オノマトペの『不自然』な音象徴」(『早稲田文学 2021年春号』)	

1. 著者名 秋田喜美 (窪園晴夫・野田尚史・ブラシャント=パルデシ・松本曜)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 328
3. 書名 「日本語のオノマトペと言語類型論」(『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』)	

1. 著者名 Shimoji, Michinori (Tasaku Tsunoda)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Berlin/New York: De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 1420
3. 書名 Irabu Ryukyuan (Mermaid Construction)	

1. 著者名 下地理則	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 180
3. 書名 方言研究における例文提示法について (『方言の研究』6)	

1. 著者名 松本曜教授還暦記念論文集刊行会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 212
3. 書名 認知言語学の羽ばたき	

1. 著者名 Akita, Kimi and Prashant Pardeshi (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins	5. 総ページ数 324
3. 書名 Ideophones, Mimetics and Expressives. (Iconicity in Language and Literature 16.)	

1. 著者名 大堀壽夫・秋田喜美 (池上嘉彦・山梨正明)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 436
3. 書名 「類像性」 (『認知言語学II』)	

1. 著者名 竹内史郎・下地理則	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版.	5. 総ページ数 192
3. 書名 日本語の格標示と分裂自動詞性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

同志社大学言語生態科学研究センター https://ling.doshisha.ac.jp/ 中日理論言語学研究会 https://www1.doshisha.ac.jp/~cjt1210/index.html 同志社大学言語生態科学研究センターのホームページ https://ling.doshisha.ac.jp/ 中日理論言語学研究会のホームページ https://www1.doshisha.ac.jp/~cjt1210/index.html 同志社大学言語生態科学研究センターのホームページ https://ling.doshisha.ac.jp/ 中日理論言語学研究会のホームページ https://www1.doshisha.ac.jp/~cjt1210/index.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	堀 博文 (Hori Hirofumi) (10283326)	静岡大学・人文社会科学部・教授 (13801)	
研究分担者	秋田 喜美 (Akita Kimi) (20624208)	名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	渡辺 己 (Watanabe Honore) (30304570)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	星 英仁 (Hoshi Hidehito) (70340461)	同志社大学・文化情報学部・准教授 (34310)	
研究分担者	下地 理則 (Shimoji Michinori) (80570621)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	影山 太郎 (Kageyama Taro) (80068288)	同志社大学・文化情報学部・教授 (34310)	削除：2020年2月19日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 シンポジウム「孤立的言語における統語論と形態法」	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 シンポジウム「漢語と諸言語との比較」	開催年 2021年～2021年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関